西陣明治の群像⑩

花莚と佐倉常七

藺草を用いる花莚はインド特産で、米国では古くから敷物として使われていた。わが国には、江戸末期に中国大陸を経て渡来している。

この花莚に着目し、生産設備を完成したのは、岡山県都窪郡茶屋町生まれの礎崎眠亀である。眠亀は文久年間に小倉帯地を発明するなど創意の人であった。国産藺草で敷物の生産を志したのは、セイロン産の帽子がヒントになったという。

眠亀は器械の発明に資産を失うまでに専心、改良を重ねて、ついに紋様挿機器を考案する。これによって生産された錦莞莚とよばれる花莚は海外でも注目され、同地の産業発展に大きな役割を果した。

錦莞莚は紋様のある花莚であり、眠亀の発明には、当時の先鋭技術であったジャカードの考え方が活かされている。

荒木幸太郎稿（荒木小兵衛長男）『佐倉常七君略傳』によれば「明治十三年、君小暇ヲ得岡山ニ至リ土地ノ有志ニ謀リ、其ノ特産タル花莚ノ製造ニ『ジャカードメカニック』ヲ応用セシム」とある。眠亀の指導に当ったのは、当時織殿の教授人であった佐倉常七であったと情勢判断される。

竹製の紋型を用いて文様を織る紋様挿機器をみると、紋紙を用いるジャカードの構造とかなりの類似点がみうけられる。このことから判断して西陣織の技術が花莚を生み出したといえよう。

岡山県の藺業史のなかに西陣との関係は記載されてはいない。しかし明治期の両産地の発展をもたらしたのは、ひとえにジャカードの技術であった。

このように考え至るとき、佐倉常七は自己の技術をただ西陣織という枠にとどめず、ひろく他の産業への応用をめざしたコーディネーターの側面もあわせ持っていたということになる。

（福本武久）